

麻布中学・高校時代の思い出——村山研一君の追悼に代えて

吉田充男

昨年5月麻布学園ワンダーフォーゲル部同期の村山君急逝の知らせを受けました。ちょうどその1年前の5月、実に40年ぶりに開いたワンゲル同期OB会に、彼が松本から参加してくれた後ただだけに、ただ狼狽するばかりでした。彼が松本でどんな研究をしてきたのか、どんな生活ぶりだったのか、もっとたくさん話を聞いておきたかったと悔やみつつ、その一端でも知ることができればとの思いで、お別れの会に出席させて頂きました。麻布学園時代の思い出は後述致します。

長くなりますが、私から他の仲間へのお別れの会の参加報告と村山君がワンゲル仲間宛に送った最後のメールを紹介させて頂きます。村山君から私達へのメールは無断掲載ですが、きっと彼は許してくれるでしょう。

以下がお別れの会の報告等です。

村山君のお別れの会に参列してきました。

参列者は4-500名。村山君の好きだった信州大学ジャズ研究会によるジャズの生演奏で迎えられた後、弔辞の傍ら数々の彼の業績と交友関係が紹介されました。仕事は大学の中に限られず、多くの地域活動もあってかなりハードな研究生活だったようです。退職後はライフワークの傍ら好きなジャズや映画の趣味を深めたい……との話もありました。AKB48のような口調の女子学生の弔辞もあり、彼の教師としての仕事の一端をうかがい知ることができました。

交友関係では、東大のフランス語クラスの友人が弔辞の中で、今年の2月に40年ぶりに会合を開いたのにわずか3ヶ月で亡くなってしまったことを大いに嘆いておられました。

我々ワンゲル同期が浅草で集まったのもちょうど一年前の5月19日でしたね。彼が松本から一泊で上京して来てみんな大いに喜んだものでしたが、同時に、誰もが40年間忙しい同じ様な環境にいたんだなとつくづく感じた次第です。

松本へはあずさ9号で3時間の長旅でしたが、初夏の緑の中、久しぶりにアルプス側の山々と八ヶ岳を眺め、思い出に浸りながら静かな時間を過ごすことができました。昔は夜行のぼろ電車で行って駅のベンチで夜明かししてから山登りしたよな、といった思い出を彼に語りかけながら。

八ヶ岳には記憶が間違っていなければ、村山君と最低2回は登っています。一度は本沢温泉から南八ヶ岳縦走、一度は大河原峠から北八ヶ岳縦走だったと思います。

彼は穂高の麓に広がる安曇野の地域開発にも尽力していたとのことでした。

彼のご冥福をお祈りします。

2013.6.10 吉田充男

追伸 吉田の独断で昨年のワンゲル同期会合の後、村山君が同部同期生に宛てたメールを添付させてもらうことにしました。相変わらず理屈っぽいものの言いようです(笑)

「ワンゲルの同期生の皆様へ

久しぶりに楽しい時間を過ごすことが出来ました。最初は、皆変わったなと思ったものの、あつという間に40年間の時間は消えてしまいました。会場も良かったですね。三社祭に偶然にぶつかったのも、いい思い出になります。21日朝の金環日食は、東京の方は曇りだったみたいですが、松本は快晴でした。

NHKの朝のニュースで、塩尻からの実況中継をやっている、私も急に思いついて、金環日食の写真を撮って皆に送ろうと思いました。そこで、無謀にも肉眼で金環日食を見ながら写真を撮りました。しかし、日食の時は夕方のようなもの、明るい太陽が見えるだけで、写真も明るい太陽が写っているだけでした。やはり特殊ガラスを使わないと分からないようです。『金環蝕』という映画の冒頭に、「外側は明るく輝いているが中は黒く腐っている」という言葉が出てきますが、石川達三（原作者）も山本薩夫（監督）も本日の金環日食を見たことはないのでしょうか。映画は面白いですが。

そこで予定を変えて自宅から撮った山の写真を送ります。一枚は常念岳、右の方の富士山型の山が有明山で、この2つの山が松本平から見たときの指標的な山です。もう一枚、左端に奥から覗いているのが穂高岳です。安曇野市穂高からは穂高岳が見えませんが、松本南部からは穂高岳が見えます。

最近では、山は登るものではなくて鑑賞するものであると考えています。（一部略記）

2012.5.23 村山研一

因みに、麻布学園は金環食の日は休校とすることがOB会で話題になりましたが、生徒任せの自由な校風は昔と変わらないようです。

時計の針を40年以上前に戻しましょう。

我々麻布ワングルは決して山登りの会ではありません。いや、有名な山に登らない訳ではないのですが、例えば、夏合宿では岩手県の著名な早池峰山に登ります。ただその後、遠野を経て三陸海岸まで、時として地元の人々と触れ合いながら普通の道を歩く。目的地の海岸にテントを張って数日過ごす。ある時は岐阜辺りから名も無き山々と村落を越えて、琵琶湖まで歩き通す、というような自然の中に溶け込むことを活動の中心に置いてい

ました。山小屋などを利用することなく常にテントを入れた重いザックを背負っていました。「自然に帰る」という哲学的な考えを幼いながら、少しでも具現しようとしていたのです。ガリ版刷りの活動報告の題名は「遍歴」です。そこには村山君の記述した記録も多く残っています。

ワングル活動がイコール山登りと誤解され、その頃、某大学のしごき事件などが発生しました。そんな折には、村山君も静かな口調ながら、その当時の風潮を嘆き、我々の活動とは別のものであるという主張を展開していました。個人的な活動として、私と村山君ほか少人数で南八ヶ岳を縦走した事があります。まず夜行列車で小諸に夜中に到着。駅前のベンチでシュラフに包まって夜明けを待ちます。小海線の始発で海ノ口辺りまで行き、いよいよ本沢温泉を目指して歩き始めます。暫くして休憩一本。周辺は高原植物が咲き乱れる気持ちのいい場所です。私はつい一本のあざみの花を摘んでしまいました。すると村山君から、山に入ったら草木一本とも刈取ってはいけない、と何時にない厳しい口調で叱責を受けました。確か、まだ中学3年の頃です。当然のこととは言え、彼には自然を大切に心が身につけているのだなと感心し、叱られた私は50年間もこの恥ずかしいことを覚えているのです。彼の研究の一端を垣間見ると地域開発と自然との調和に心を砕いている様子が窺え、自然や環境に対する一貫した姿勢には驚くべきものがあります。

一方「哲学」だけではワングル活動はできず、我々は週に2-3回学校周辺で厳しいトレーニングを続けていました。まず、学校から有栖川公園までダッシュし、柔軟体操の上、再度マラソンに入ります。鳥居坂下まで下り六本木まで急坂を登ります。今の六本木ヒルズ脇を抜けて高樹町方面に登り左折します。

回り込んで広尾に下り再度有栖川公園に戻ります。地図を見て下さい。何のことはない東洋英和、東京女学館、聖心、順心女子高と女子校回りに毎週励んでいたのです。村山君もあの難しげな顔をして。彼が恥ずかしげに左上方に視線を泳がす癖は、こんな環境の中でついたのかも知れません。単なる想像ですが。

話題を変えます。彼とは頻繁に新宿文化シアターというかなり前衛的な映画だけを上映する映画館に通いました。覚えているのは「薔薇の葬列」(ピーター)、「かくも長き不在」(仏)、マルチェロ・マストロヤンニ主演の伊前衛的映画の数々。いずれも、人間の本质や戦争の悲劇をむき出しにして画く非日常的な作品ばかりでした。中学3年から高校2年位の間です。彼は思索の人でした。そして我々は、ませていました。ある意味シティーボーイたる麻布生の一類型だったかも知れません。私はむしろ、そんな格好良い村山君について行っただけです。

最後に一つだけ聞きそびれてしまったことがあります。心残りです。村山君、フランス語は話せるようになったのかな？ 僕のいた金融界の国際標準語は英語なので、仏語の実力はすっかり衰えてしまったけど(言い訳)、今でもR(エール)の発音くらいできるぜ。

彼と昭和43年春に別れたのは渋谷の大型書店「大盛堂」の前です。その時、既に早稲田政経学部の学生として1年間大学生活を送っ

ていた私は、暇に任せて大学の語学研究所仏語講座に参加したり、NHKのラジオ仏語講座を年間通して聞いていたりしたものでした。彼が東大に受かって祝いの電話でもしたのか詳しい経緯は忘れましたが、向学心に燃える彼は一日でも早く仏語を勉強したい、については、NHKのラジオ仏語講座のテキストが欲しいという話になったのでしょうか。そこで私の持っていた過去1年分のテキストを譲ることとなりました。その12冊分のテキストを渋谷の書店の前で渡して「じゃ、頑張れよ」と言って別れたのです。その後、若干の文通はあれ、転勤族の銀行員と松本の大学の先生は会う機会がなく、冒頭のOB会まで実に40年強の月日が流れてしまったのです。それぞれに求められる場所で頑張る。男は、いや人はそうしたもののなのでしょう。でも友はずっと友です。

ワングル同期、高山不二雄君(早大理工卒)が、村山君お別れの会の報告を思い浮かべながら、地元の菖蒲園で詠んだ句があります。足立俳句連盟特選に入選したとのことです。

「うつりゆく 時の水際に 花菖蒲」

改めて、村山君のご冥福をお祈りします。

(私事ですが、その後体調を崩し年末まで長期入院してしまいました。退院直後に書いた冗長な文章です。お許し下さい。)